



Edited by Mitsuharu Matsuoka

*Evil and Its Variations in the Works of Elizabeth Gaskell: Sesquicentennial Essays*

木村 正子

(国際多元文化専攻 博士後期課程 2013 年修了 京都女子大学非常勤講師)

本書は、エリザベス・ギヤスケル没後150周年を記念して、松岡氏の慫慂により16ヶ国32名の研究者から寄せられた論文集である。全篇英語で執筆されており、ギヤスケルの作品を文字通りグローバル的視座から読み解いたものと言える。巻頭言、序文、年譜、執筆者紹介、謝辞、編者の序論に続いて、32篇の論考という構成で、内訳はギヤスケルの主要な小説7作品と伝記1作品に対して3本ずつ計24本、異なる短篇小説3作品をそれぞれ扱ったものが4本、中篇小説3作品をそれぞれ論じたものが3本、そして書簡集が1本という配分である。

本書の特徴は、タイトルに掲げられるように、「悪 (evil)」というテーマに特化した点にある。ギヤスケルと言えば、未完の遺作『妻たちと娘たち』の跋文に当時の編集者が記した「心優しい婦人」という賛辞が有名だが、この表現が強調されるあまり、彼女の作品そのものも同様に「心優しい」ものである、あるいはそうであるべきだという前提での評価が与えられてきた。その固定的かつ狭義的な視点による評価が時代を超えて踏襲され、ギヤスケル及び彼女の作品に対する解釈に先入観をもたらしてきたことは否めない。これは20世紀半ばの批評家ディヴッド・セシルの批評においても明らかである。

今日ギヤスケルはヴィクトリア朝女性作家として確固たる位置を占めているが、同時期の女性作家たち（ブロンテ姉妹およびジョージ・エリオット）に比較すると、一般的認知度はやや低い。それには、他作品が現存の社会システムに堂々と否を突きつけるようなメッセージを放つのにに対し、ギヤスケルは「ミセス・ギヤスケル」という既婚婦人の筆名のもとで、女性らしく、またキリスト教思想を基盤にした平和的解決を示唆する家庭的な物語に専心したと解釈されることに一因があるだろう。もちろんこの解釈は間違いではなく、ギヤスケルの作品には家庭内での些細な出来事を描いたものが多い。だが、ギヤスケルの世界はその範疇にとどまるものではない。

本書の巻頭言で批評家の J. Hills Miller 氏が言及しているように、ギヤスケルの作品は『リア王』や『失楽園』とは異なり、悪 (というテーマ) を焦点化することはないと思われがちだが、作品の随所に社会的・個人的な悪の表象を見ることは十分に可能である。Miller 氏は、『克蘭フォード』における3種類の悪を例証し、19世紀半ばの英国における女性の地位 (の低さ)、当時の階級制度、そしてこれら両者の産物として、娘を拘束する父の偏見を取り上げている。同様に、ギヤスケル協会会長による序文で著名な Jenny Uglow 氏の指摘が紹介されているが、ギヤスケルが扱う悪は原罪や悪魔の所業ではなく、社会悪であるというのも当を得たものである。フィクションにおける悪の描写・表象は、心身への暴力行為、殺人、暴動などセンセーショナルな社会的事件を題材にすることで、当時の読者の関心と作

品の売り上げを高める効果をもたらした。しかし Miller 氏が指摘するように、リア王とコーデリア、そして『克蘭フォード』のジェンキンス牧師とミス・マティという二組の父娘関係を比較すれば、関係破綻の原因は同種のものであり、そこには英国社会における家父長制と男性優位主義という負の連鎖が読み取れる。一国の大事と家庭内の不和が相似形として浮かび上がるのである。

だがギヤスケルは当時の社会システムをあからさまに批判することはなく、またある個人を集中攻撃して勧善懲悪的な解決策を講じることもない。その代り、社会制度や慣習という不可視にして不可避の悪の犠牲者に寄り添い、その窮状を訴えるのがギヤスケルの手法であると言えよう。

悪の定義や認識を一元的にとらえるのは困難であり、また善悪を二元論で解釈するのも早計である。さらに社会悪は時代や社会の変化に応じて正反対の解釈に転じることもあり得る。だがギヤスケルが提示する社会悪とその影響の表象は、現代に生きる我々の日常生活と決して無縁のものではない。ギヤスケルが『メアリ・バートン』で訴えたように、労資間が金銭関係ではなく共感によって結ばれた時に、階級を超越する人間関係が生じるという例はどうだろうか。これは理想論に過ぎないかも知れないが、制度改革を待つ間に市井の人々の間で打つ手があることを示唆するものと言える。ギヤスケルの作品から学ぶべきことは読者の数と同じだけあるだろう。本書はそのような解釈の可能性の幅をさらに広げてくれるものである。

(大阪教育図書、2015年)